

## 東日本大震災に対する日本腎臓学会としての対応

2年前の出来事であり、その当時の記憶を辿りながら日本腎臓学会としての東日本大震災への対応を述べる。震災時には私は都内のホテルで日本腎臓学会の西澤事務局長と電話中であった。揺れが強いので、事務局長に促されて、電話を切って慌てて机の下に潜り込んだ。その夕に都内のホテルで日・中・韓腎カンファレンスのレセプションが開催される予定であったが、タクシーは全く捕まらず、出席を諦めた。携帯は全く繋がらず、欠席することはパソコンからのメールで伝えることができた。

震災時には透析患者さんへの対応が重要となるので、日本透析医学会の秋澤忠男理事長、日本透析医会長の山崎親雄会長と連絡を取り対策を協議した。情報が混乱してはいけないので、まず情報を一本化することとした。3月13日には日本腎臓学会のホームページの情報を日本透析医会のものに統一することとし、日本透析医会災害情報ネットワーク災害時情報伝達・集計専用ページ<http://www.saigai-touseki.net/>より災害情報提供・収集が可能であることを伝えた。また、遠隔地においても協力が必要となる可能性があるため日本腎臓学会会員施設での透析患者受け入れ可能状況（入院透析、外来透析）につきoffice@jsn.or.jpあてに情報提供をお願いした。被災地からの患者受け入れについては緊急を要しており、よりスムーズに実施される必要があった。当初は既存のKidney-Shareのメーリングリストが用いられていたが、腎臓学会では危機管理専用のメーリングリスト（jsn-kikikanri@umin.ac.jp）を作成し、双方向で意見交換を行うことを可能とした。未曾有の災害にもかかわらず皆様方のお力添えで東北地方の1,300名弱の透析患者さんを無事に移送して治療を継続することができた。

ISNを初め世界の多くの国々の方々からお見舞いのメッセージをいただいた。南学正臣先生はバンクーバーでの国際腎臓学会で、榎野はプラハでのヨーロッパ腎臓学会の開会式で東日本大震災の報告を行った。さらに国際腎臓学会において募金活動を行い、日本腎臓財団の東日本大震災透析医療復興支援寄附金の事業に協力し日本腎臓財団に寄付し、第4回日中韓腎カンファレンスとして読売光と愛の事業団にも寄付するなどの活動を行った。東日本大震災時の地域情報交換の教訓としては、電話・FAX（携帯・固定）はほぼ不通でインターネットが有用な個人間情報交換ツールとなったことである。

一般社団法人日本腎臓学会

前理事長 榎野 博史

(岡山大学腎・免疫・内分泌代謝内科学)